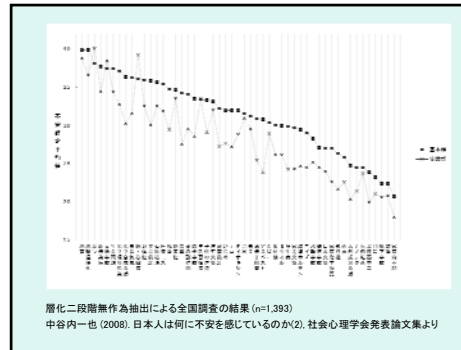


2011.9.19 社会心理学会シンポジウム
東日本大震災を乗り越えるために

次の大地震／大津波による 被害抑制に向けて

中谷内一也
同志社大学 心理学部



- これまでどこにフォーカスしてきたか
 - ・専門家-一般人のギャップ
 - ・高未知性ハザードの時間的推移
- これからどこにフォーカスすべきか
 - ・直接的な被害抑制に結びつく部分
- すでに始めた研究と今後必要な研究
 - ・津波の「高さ」についてのリスク判断研究
 - ・日常的な規範をいかに切り替えるか

津波の「高さ」についてのリスク判断研究

3月19日 読売新聞
4月10日 読売新聞
4月4日 読売新聞

大きな津波高さが何度も示されることで、「危険な津波」「避難すべき津波」の高さがかえって上昇してしまうのではないかと。
日本人が津波の恐ろしさを再確認したことは間違いないし、リスク認知も高まったことは疑いないが、判断基準は災害が巨大すぎてかえってvulnerableになったのではないかと。
→ アンカリング・ヒューリスティック

- 「どれくらいの津波予測で避難するか」
- 「どれくらいの高さの津波を危険と思うか」
- 「大津波警報はどれくらいの高さ予測で発令されるか」
- について震災1年前の全国調査データあり
- そこで同じサンプルプールから、東海・東南海・南海地震が予想される西日本の住民を対象に、調査を実施(4/11)

- 「どれくらいの津波予測で避難するか」
 - 1mかそれ以下で避難 (震災前)約60%
 - (震災後)約38%に低下
 - 5m以上でないと避難しない (震災前)約7%
 - (震災後)約25%に増加
- 「どれくらいの高さの津波を危険と思うか」
 - 1mかそれ以下で危険 (震災前)約70%
 - (震災後)約45%に低下
 - 5m以上でないと危険でない (震災前)約4%
 - (震災後)約22%に増加

低い津波で十分危険であることを伝えるべき
→木造家屋は1mで半壊、2mで全壊

アンカリングの論文内の見出しは;
Adjustment and anchoring (Tversky & Kahneman, 1974)

そのココロは;
たまたま目にした数値に「投錨」してしまうだけでなく、後の情報に基づく「調整」が不十分である
→ 記録破りの指標を報じる際には、より低い値でも十分危険であることを併せて伝えないと、後からの調整は困難

- 社会的認知の観点から気になる点
- ・「三(四)連動地震でも津波が恐ろしい」あまり、家屋倒壊、火災のリスクが見逃されていませんか？
 - 備えの基本は耐震補強、倒壊防止
 - ・地震、津波、原子力発電、放射線、以外のさまざまなハザードに対するリスク認知はどう変化した？
 - ・その他もろもろ

集団研究の観点から気になる点

今回の地震では9割が水死。別の見方をすると超巨大地震にもかかわらず直後は犠牲者の9割が生存していた

津波でんでんこ

～各自でんでんに、大急ぎで高台を目指して走ること

釜石市内の小中学校で有効性が実証

集団研究の観点から気になる点

今回の地震では9割が水死。別の見方をすると超巨大地震にもかかわらず直後は犠牲者の9割が生存していた

津波でんでんこ

～各自でんでんに、大急ぎで高台を目指して走ること

釜石市内の小中学校で有効性が実証

しかし、その拡大には日常的な規範が障壁となる

× 情報収集して冷静に対処、パタパタあわてない

△ みんなで協力し、助け合う

→ 今回の震災でハードだけでは防ぎきれないことが明確に

社会科学者にやれることが多くあるのではないか？

ありがとうございました